

地域で開催されるイベントでの大学生の連携協力に見る成果と課題：
かけがわ親子工作教室の取り組みを通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00005700

地域で開催されるイベントでの大学生の連携協力に見る成果と課題

—かけがわ親子工作教室の取り組みを通して—

Result and problem of the cooperation of the university student by the local event

—Through the support of KAKEGAWA craft class for parent and child—

高橋 智子

Tomoko TAKAHASHI

（平成22年10月6日受理）

1. はじめに

静岡県掛川市では、毎年夏に「かけがわ親子工作教室」（主催：好きです！かけがわのまち実行委員会）を開催している。その企画及び実施には、主催者側の意図を踏まえながら東京学芸大学の学生有志（以下、学芸大生とする）が6年前（2005年）から関わってきた。静岡大学の学生有志（以下、静大生とする）が学芸大生や実行委員会の方々と連携協力し参加をするようになったのは、4年前（2007年）のことである。本論では、静大生と学芸大生、地域の人々が連携協力を行ってきたこれまでの取り組みの報告を行い、各大学の学生連携による成果及び課題について考察を行うことを目的とする。

2. 「かけがわ親子工作教室」実施の経緯

静岡県掛川市では、毎年冬（12月～1月）に「掛川ひかりのオブジェ展」（主催：好きです！かけがわのまち実行委員会）を開催している。このイベントは、年末年始に掛川市の中心市街を市民や生徒・学生・民間企業などによる手づくりのひかりのオブジェで彩り、活性化することを目的としたものであり、本年度で11回目を向かえる。「掛川ひかりのオブジェ展」の概要と様子は、図1～5に記す。「掛川ひかりのオブジェ展」には、地域の学校や企業など様々な団体が参加しており、近年では40～50ほどの作品応募がある。この地域イベントに関連して、毎年夏に開催されているのが「かけがわ親子工作教室」（以下、工作教室とする）である。学芸大生及び静大生が参加する以前からも、この工作教室は実施されており、その主な目的は「掛川ひかりのオブジェ展」の出品作品づくりを行い、さらに将来の作品出品者の育成につなげようというものであった。以前は、夏と秋の2回実施されていたが、現在では夏の1回のみの実施となっている。工作教室に学芸大生が参加するようになってからは、市街の活性化という視点に加え、美術教育の視点からも目標を設定し、主催者側と共に工作教室の企画及び実施に取り組んできた。静大生が参加するようになってからも、その取り組みが継続されている（図6）。

3. 「かけがわ親子工作教室」への大学生参加のきっかけ

工作教室は、2001年の「掛川ひかりのオブジェ展」(第2回)に伴い始まった。各大学の学生が参加する以前は、主催者である「好きです！かけがわのまち実行委員会」が中心となり工作教室の企画及び実施を行ってきた。2004年に、学芸大生が「掛川ひかりのオブジェ展」(第5回)に参加したことをきっかけに、2005年から学芸大生が工作教室の支援を行うようになった。静大生が、工作教室に参加するようになったのは、4年前(2007年)のことである。参加のきっかけは、工作教室に関わっていた東京学芸大学の担当教員と筆者が同じ研究会に所属しており、その研究会を通して、掛川での取り組みについて紹介を受けたことであった。参加初年度の学生募集は、ゼミ生を中心に声かけを行い、2007年の工作教室から静大生が工作教室に参加するようになった。次年度の学生募集からは、ゼミに加え講義の中で紹介を行ったり、前年度工作教室に参加した学生から後輩へ声かけを行ったりした。これまでの工作教室参加学生数と学年分布を図7に記した。静岡大学の参加学生の特徴としては、3・4年生の参加者が多く、主に4年生が中心となって取りまとめを行ってきたことが挙げられる¹⁾。対照的に、学芸大生は、1・2年生の参加者が多く、主に2年生が中心となり取りまとめを行っている²⁾。

実施時期	12月～1月(本年度は、平成22年12月5日～平成23年1月21日)
目的	年末年始に掛川市の中心市街を市民や生徒・学生・民間企業などによる手づくりのひかりのオブジェで彩り、中心市街地を活性化する。
場所	掛川駅から掛川城を結ぶ、駅前通りから城下通りまでの街路樹脇
参加	自由(募集要項による事前応募有り)
募集作品	①地球環境へのメッセージをこめた作品 ②その他自由な表現の作品
作品規格	幅1.8m×奥行き0.9m以内
主催	好きです！かけがわのまち実行委員会

図1 「掛川ひかりのオブジェ展」概要(2010年度参照)

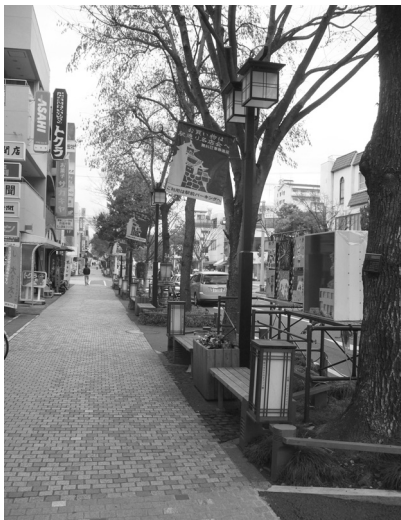


図2 作品展示の様子



図3 作品展示入口の看板

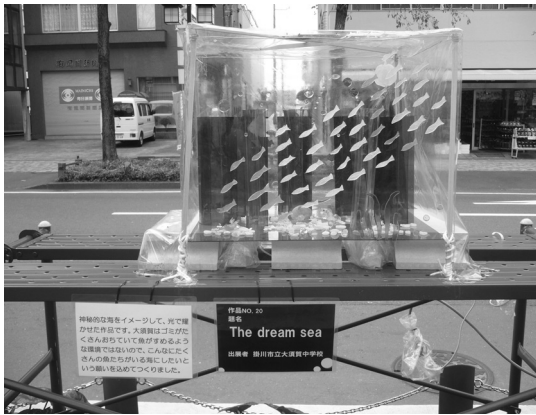


図4 過去の地元中学校出品作品1



図5 過去の地元中学校出品作品2

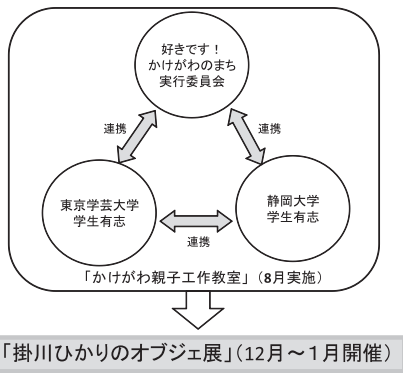


図6 各大学と地域の連携

	1年	2年	3年	4年	計
2007年			7名		7名
2008年		8名	5名	2名	15名
2009年	1名		6名	5名	12名
2010年		1名	4名		5名

図7 静岡大学工作教室参加学生数及び学年分布 (当日参加せず準備のみの学生も含む)

4. 「かけがわ親子工作教室」の概要

工作教室の概要を、図8に記す。工作教室で実施する題材は、過去の取り組みや「掛川ひかりのオブジェ展」での作品展示への対応などを加味し、毎年施行錯誤を繰り返しながら、現在の内容になっている。作品の支持体は45cm×45cmの有孔ベニヤであり、工作教室当日に子ども1人に対し1枚配布される。時間内に子ども達が作品を完成できるように、現在の作品サイズとなっている。この有孔ベニヤは、掛川市の材木店でひとつひとつ手づくりされているものである。工作教室での主な活動内容は、有孔ベニヤに水性ペンキで絵を描いたり、素材を張りつけたりした後、作品の背面から家庭用LEDイルミネーションライト（100球）を差し込んで作品を完成させるというものである。この題材は、工作教室開始当初から実施されているものであり、現在も基本的な内容に変化はない。しかし、各大学の学生が連携して工作教室に参加するようになってからは、お互いに教材研究を繰り返しながら、材料・用具や導入などの工夫が行われている。

5. 大学間の連携による地域イベントへの参加

この取り組みの大きな特徴は、静大生と学芸大生の連携による地域イベントへの参加にある。各大学の学生連携を市民活動が支えているともいえる。それぞれが離れている中で、連携しな

から工作教室を企画及び実施することは容易いことではない。しかし、静大生たちはこの参加を通して、学芸大生や地域の方々と共に、街の活性化や子どもたちの成長やお互いが連携することの意味について考え、その中で自分たちの表現や役割を問い直し再認識することを繰り返している。3者の連携を通して実施される工作教室では、工作教室当日の参加だけではなく、実施までの過程の中で様々な経験を学生が積んできている。以下から、工作教室の企画及び実施過程における学生の取り組みについて述べていく。

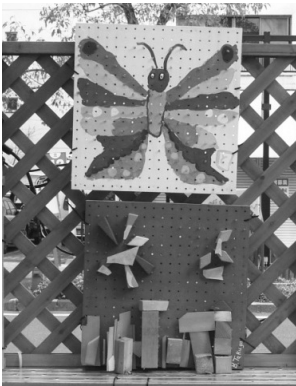

実施時期	8月中旬（本年度は、8月15日に実施）
場所	掛川市商工会議所
参加対象	5歳～小学校6年生までの親子60組（午前・午後／各30組）
制作時間	2時間30分（午前・午後の2回実施）
参加費	1作品につき2000円（材料費，保険代含む）
目的	<p>【イベントとしての目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○掛川ひかりのオブジェ展の参加のきっかけになることができる。 ○子どもの自主的な創造性を引き出し、活動を通して、達成感や感動を味わうことができる。 ○制作を通じて、参加する親と子どものコミュニケーションや会場の人同士の交流を深めることができる。 <p>【美術教育的な視点から見た目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○さまざまな用具や材料・技法に触れ、自由に組み合わせながらイメージを膨らませることができる。 ○光に触れ、その良さを生かしながら、表現することができる。 ○周りのお友達の作品を認め合い、お互いの作品のよさを感じることができる。
内容	45cm×45cmの有孔ベニヤの上に、水性ペンキで色を描いたり、ものを貼りつけたりし、最後に100球のLEDイルミネーションライトを穴に差し込んで作品を完成させる。
作品写真	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>昼の様子</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>夜の様子 (過去の作品例)</p> </div> </div>
主催	好きです！かがわのまち実行委員会

図8 工作教室概要（2010年度の工作教室参照）



図9 静大生の実行委員会への参加



図10 工作教室前日の学生合同打ち合わせ

(1) 実行委員会への参加

「掛川ひかりのオブジェ展」に向け、実行委員会が掛川市内で定期的で開催されている。実行委員会のメンバーは、好きです！かけがわのまち実行委員や大学生で構成されている。学芸大生は、距離的な問題から実行委員会へ参加することが難しいが、静大生は参加することが可能であり、これまで学生の都合を考慮しながら、実行委員会へ参加してきた（図9）。この会議では、工作教室や「掛川ひかりのオブジェ展」の計画確認やイベントに関わる事項の審議、お互いの情報交換などが行われている。また、この会議は、静大生と学芸大生の話し合いや教材研究の現状を実行委員会の方々へ伝える場としても重要な役割を果たした。さらに、学生にとっては、様々な年代や職業の掛川市の方々と交流し意見交換ができる貴重な場となった。実行委員会での話し合いの内容は、後日学芸大生にも電子メールなどを活用し報告された。

(2) 東京学芸大学の学生との打ち合わせ

学芸大生と連携を行いながら工作教室を企画及び実施していくためには、工作教室の目的の検討、教材研究（参考作品制作含む）、使用材料・用具の検討及び準備、指導案作成、情報の共有などを行う必要がある。静岡大学の参加学生は、すでに教育実習を経験している3・4年生が多かったため、教材研究や指導案作成の経験は豊富であった。しかし、造形活動を通して他大学の学生と連携を行いながらイベントを企画及び実施する経験はこれまでに無く、この工作教室の取り組みが初めての経験となった。連携のためには、お互いの考えや思いを交流・共有していくことが必要不可欠だが、大学同士の距離が離れているために、直接対面して話し合いを行う機会が少なく、連絡方法についてはこれまで様々な方法を取り入れてきている。

1) 電子メール及びHPの活用

参加初年度から現在に至るまで、学芸大生との主な連絡方法は電子メールである。静大生の工作教室参加以前より、インターネット上でグループ活動の場を提供するHPサービスを利用した専用のメーリングリストが作成されていたため、静大生もこのメーリングリストに登録を行い、現在もこれを活用している³⁾。また、メーリングリストのみならず、HPの有効活用も考えていたが、HP閲覧には各自がインターネット上でIDを取得する必要があるため、未だ参加学生に浸透していない。ただ、このHPにはデータ保存の機能があるため、各大学の会議議事録や教材研究の資料などの保存と情報の共有に役立っている。

2) 電話の活用

静大生の参加2年目には、電子メールの活用だけでなく、各大学の代表者による電話でのやり取りが始まった。また、参加3年目には、各大学の学生を工作教室の役割毎にグループ分け⁹⁾し、工作教室の教材研究などに取り組んだため、グループの代表者同士による電話でのやり取りが行われた。

3) 対面による打ち合わせ

対面による打ち合わせは、工作教室前日⁹⁾及び当日に行われた(図10)。また、参加2年目・3年目になると、工作教室実施前に学生が自主的にお互いの大学を訪問し、対面による打ち合わせが実現した。対面による打ち合わせを経験した学生からは、「直接会って話すことが一番伝わるといった。」などの意見が出てきた。また、工作教室の内容を話し合うだけでなく、お互いの交流を深めるためにも、各大学訪問や対面による打ち合わせは効果的であった。

4) SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の活用

前述したHPについては、参加学生に十分浸透しなかったため、本年度よりSNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) を活用するようになった。HP同様、SNSにも個人登録の必要性はあるが、近年SNSを個人で利用している学生が多く、学生にとってより身近なツールであるといえた。SNSについては、その活用が以前から話題になっていたが、本年度より地域SNSである「eじゃん掛川」内に、工作教室のコミュニティーを立ち上げて、情報の共有及び発信を行っている⁹⁾。

5) Skype (スカイプ) の活用

Skype (スカイプ) とは、コミュニケーション・ソフトウェアのひとつであり、ダウンロードを行いインストールするだけで、誰でも簡単に利用できる音声通信ソフトウェアである。フリーソフトであること、Skypeユーザー同士の通話が無料であること、設定を行えばテレビ電話が利用できるなどの機能が備わっていたため、本年度初めてSkypeを活用した静大生と学芸大生の会議を実施した。Skypeによる会議は、1度だけの実施であったが、対面の打ち合わせ同様、「1度しか会議を行わなかったが、それでも効果的だった」「メールだけで伝えきれない部分を伝えたり、文章による読み違いを補ったりすることができる」「メールだけのやり取りでは、話し忘れている内容や解決しないままの議題があると不安になっていたが、実際顔を見て話せたことはそれらの不安解消に大きく役に立った。」などの意見が学生から出てきた。

(3) 学内での打ち合わせ

静大生は学芸大生とやり取りと並行して、学内での会議も重ねていった(図11)。東京学芸大学においても、同様に学内で会議が重ねられた。学内会議の取りまとめを行ったのは、各大学の代表学生であった。毎年、静大生と学芸大生から代表学生(1名)が選出され、代表学生は学内の取りまとめや各大学の連絡係を担い、学内会議の日程調整や資料作成などを行った。学内会議では、目的の検討、教材研究、工作教室当日の実施計画検討、材料・用具の準備及び調達、参考作品制作などを行った。特に教材研究では、野外展示という条件を視野に入れながら、実際に参考作品を制作し、材料・用具の適正や技法の工夫などの検討を行った(図12)。また、導入や素材提示、作品鑑賞会の工夫などの検討も行った。本年度は、地域SNS「eじゃん掛川」内のコミュニティーに、各大学の会議資料や素材・題材研究などの資料を更新していき、情報共有に努めた。こうした各大学の会議や教材研究などを踏まえ、工作教室当日までに指導計画の作成が行われた。指導計画には、各大学で共有した工作教室の目標や内容、題材観や準備物、



図11-1 静大生の学内打ち合わせ



図11-2 静大生による素材検討会



図12-1 参考作品制作

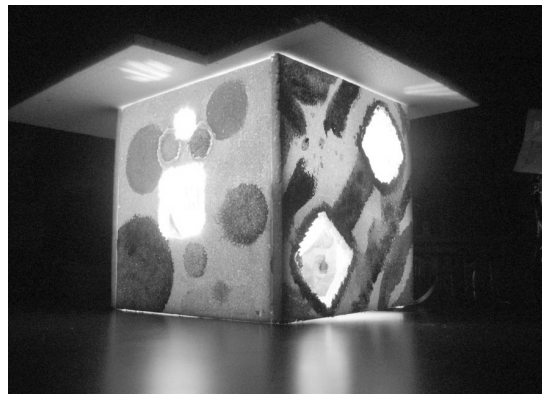


図12-2 教材研究作品

用具の使用方法、注意事項、会場の配置図、当日の具体的なタイムテーブル、導入の具体案などが示された。本年度の工作教室の題材観と準備物やその使い方を図13、当日の流れを図14に記す。

(4) 工作教室への参加

工作教室本番では、静大生と学芸大生は前日に掛川市へ到着し、各大学の学生や実行委員会の方々と打ち合わせや会場設営及び準備を行った(図15)。会場設営終了後には、短い時間であるが当日のリハーサルも行った。リハーサルを通して、静大生や学芸大生、実行委員会の方々が意見交換を行い、当日の進め方や全体の流れを確認した。本年度は、工作教室の導入時に学芸大生が制作した映像の上映を行ったため、その投影のリハーサルも行った。

工作教室当日、静大生や学芸大生は参加した子どもや保護者と積極的に自分から関わりながら、制作支援や声かけを行っていった。近年は、参加親子を工作教室開始前にグループ分けしている。本年度は、6つのグループに分けた。1グループは、5~6組の親子で構成される。このグループ毎に、静大生と学芸大生が子どもたちに制作説明などの導入や活動支援を行っている。グループ分けを行うことで、より細かい子どもへの支援や対応が実現している。学生のグループ分けについては、参加学生の経験や学年、各大学の学生の割合などを考慮して事前に行っている。各大学混合グループでは、学生同士が所属に関係なく協力を行い活動に取り組めるようになっている。工作教室は、午前と午後と同じ内容で2回実施され、工作教室終了後は、静大生、学芸大生、実行委員全員で材料及び用具や会場の片づけを行っている。

<p>工 作 教 室 題 材 観</p>	<p>工作教室とは、夏休みの期間を使い、親子で光のオブジェをつくる場である。工作教室でつくった作品は12月のオブジェ展に飾られる。この工作教室には、参加した人がいつかオブジェ展に出品できるようにという願いがこめられている。活動内容は例年、有孔ベニヤに装飾を施し、LEDライトを後ろからはめ込むことで、子供たちの様々な作品と光を織り交ぜたオブジェを制作している。今年も昨年同様、絵の具だけでなくカップやセロハンなど様々な素材を準備して、これらを子どもたちが自由に使える空間をつくり、子どもの表現の幅を広げていきたい。また、「掛川ひかりのオブジェ展」を意識して、「光」を意識した作品づくりも考えていきたい。具体的には、素材を単に有孔ベニヤに貼りつけていくのではなく、アルミ紙やカップ、セロハンを使い、光の効果を踏まえながら装飾できるようにする。参加の体系については、1班5組ほどに分け、計6班とする。各班に学生3～5人を含む。今年度は、掛川西高校の生徒さんも加わり、より地域に広まる活動になるよう考えている。活動では、絵の具で描いたり、いろいろな素材を組み合わせたりしながら、子どもが自由に作品をつくっていく。一人一人が材料を自由に組み合わせ、夢やイメージを膨らませながら、表現していくことを目指していきたい。導入時からきめ細かな指導を通して、子どもの表現の可能性を引き出していくことをねらいとしている。制作後の活動については、例年同様、参加者同士が鑑賞する場面を設定し、友達のよさを認めあえるような鑑賞活動を行っていきたい。工作教室の目標のひとつである親子のコミュニケーションについては、去年の工作教室では様々な親子関係が見受けられた。「子どもが制作しているのを親が見守っていた親子」「親と子が一緒に制作している親子」「親が描いている様子を子どもが見ている親子」など、そのあり様は様々だった。私たちが理想とする親子関係は「親子でコミュニケーションをとりながら、協力して作品をつくる」という親子関係だ。そのために鑑賞では親が子に賞状を渡す場面を設定し、親子のコミュニケーションを深めるきっかけとしたい。また、親と子だけでなく参加親子同士のコミュニケーションも深まるように、制作は6人の班の体系で行う。制作の中で、学生スタッフが「隣のお友達はこんなことをしているよ。」と自然な声かけをしていくことで、参加親子同士のコミュニケーションも深めていきたい。</p>
<p>準 備 物</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・45cm×45cmの有孔ベニヤ ・100球のLEDイルミネーションライト ・ペンキ ・筆 ・ローラー ・はさみ ・接着剤 ・木片 ・プチプチ（緩衝材） ・セロハン ・うちわ ・透明折り紙 ・カップ ・ニッパーペンチ ・ガムテープ ・ポンポン（布に綿を包んだもの） ・スタンプ（スチロール・スポンジで丸や三角、四角など簡単な形のものを用意） ・BGM（鑑賞用） <p style="text-align: right;">など</p>
<p>準 備 物 の 使 い 方</p>	<p><ローラー> 背景を一気に塗るときに使う。また、星形に切り抜いた紙を有孔ベニヤにおき、その上からローラーを転がすと星形に色を塗ることができる。厚塗りをしてしまうと、乾くのに時間がかかるので注意する。</p> <p><カップ> カップは接着剤で貼付ける。カップにペンキで絵を描いてから有孔ベニヤに貼付けたり、カップの中にセロハンや麻ひもなどを入れてから貼付けたりするなど様々な工夫が可能。</p> <p><セロハン> セロハンは直接板に貼付けたり、針金に貼付けたり、カップの中に入れてたりして使うことができる。</p>

図13 工作教室題材観及び準備物（本年度学生が作成した指導計画を参照し筆者がまとめた）

時間	活動	支援者の活動	留意点
9:00～ 13:00～ <30分間>	受け付け 開始	●保護者への賞状説明 ●参加者誘導	・兄弟姉妹が別れないようにする ・班ごと自己紹介などを行う ・ベニヤ・LEDライトに名前を書く
9:30～ 13:30～ <20分間>	開会&オリ エンテー ション	●あいさつ注意など：実行委員会 ●司会：学生 ●映像 ●班長紹介等	・実行委員会メンバー／学芸大生 ／静大生／掛川西高校の生徒さ んの紹介をそれぞれに行う
9:50～ 13:50～ <115分間>	班ごと制作	●道具・材料・技法についての説明 ●絵の具屋さん、素材屋さんの説明 ●技術的に困っている参加者にア ドバイス・援助（団扇で乾かすな ど）	・作業残り45分になったら電球を さしこませる（点灯確認を行う） ・親の表彰状書きを促す （11:00/15:00） ・ドライバーは各自持参している ので、LEDライトがベニヤの穴に 差し込めないときに使用させる
11:45～ 15:45～ <10分間>	鑑賞	●壁沿いに作品を並べ、合図で一斉 に点灯する	・事前に作品を並べる土台（ビール ケース）を並べる。各作品のLED ライトを連結接続する
11:55～ 15:55～ <5分間>	表彰式	●事前に保護者に書いてもらった 賞状を親から子へ授与する ●賞状は子と向かい合って読み上 げながら授与してもらう	・表彰状授与の際、BGMを流す
12:00～ 16:00～	閉会	●講評：実行委員会 ●あいさつと今後の予定の提示	・作品は持ち帰ってもらい、オブ ジェ展前に再度持参してもらう

図14 工作教室当日の流れ（本年度学生が作成した指導計画を参照し筆者がまとめた）



図15-1 会場設営終了後の様子



図15-2 学生考案の素材屋さんの様子

(5) 事後反省会の実施

工作教室後には、事後反省会を実施している。反省会は、工作教室終了後に現地で簡単に行うものとメール（全体メーリングリスト）で行うもの、各大学や実行委員会単位で後日行うものとがある。現地やメールでの反省会では、個人意見を直接的に把握することができ、各大学や実行委員会単位で行う反省会では、その個人意見を踏まえながら改めて工作教室の反省点などを議論した。静岡大学での学内反省会では、参加した感想や工作教室当日の具体的な反省点、また当日までの流れや題材に関する課題などについて意見を出し合ってきた。反省会終了後には、内容をまとめた資料を作成した。この資料はHPに更新し、学芸大生が自由に閲覧できるようにしている。

本年度の反省会については、学芸大生は既に実施しており、その内容がSNSのコミュニティに更新されている。また、SNSコミュニティ内には、静大生、学芸大生、実行委員の方の個人の感想も書き込まれている。そのため、本年度はメーリングリストによる個人感想のやり取り数が減少している。静岡大学では、後期に入り反省会を実施する予定である。この反省会の内容はSNSのコミュニティに更新すると共に、掛川市で開催される実行委員会の中でも報告する予定である。

6. 各大学の学生連携による成果

こうした一連の取り組みに参加した学生からは、単にイベントに参加して楽しかったという思いだけでなく、様々な学びを感じ取っていることに気づかされる。以下から、静大生と学芸大生の連携に着目して、取り組みの様子や反省会の感想からその成果を考察する。

(1) 連携の意義とそのプロセスに関する学び

1つ目の成果としては、学生自身が連携の意義を考え、そのプロセスを学ぶことができている点が挙げられる。他大学の学生と共にひとつのイベントを企画及び実施していく経験を通して、連携が単なる役割分担や事務的な関わりではなく、それぞれの良さを活かしながら協同していくものであることを実感している。また、そのプロセスでは、相互理解や交流の必要性、連携協力の楽しさ・喜び・難しさを実感しながら、参加学生が連携の意味を改めて捉えなおすことを繰り返している。平成20年に改訂された新学習指導要領において、「連携」は重要なキーワードのひとつになっており、図画工作科・美術科の教員には「他教科」「他教員」「地域」「美術館」などとの連携が求められている。教育学部の学生にとって、学部時に様々な連携の経験を重ね、連携の意義やそのプロセスを自分の経験から実感し学んでおくことは重要なことであるといえる。実際に工作教室の企画及び実施のプロセスに関わった学生の中には、新たな問題意識を持ち、自ら造形ワークショップを開催するなどの展開をみせているものもいる⁷⁾。

(2) 自主的な取り組みや働きかけへの気づき

2つ目の成果としては、学芸大生とのやり取りを通して、自主的な取り組みや相手とのコミュニケーションの必要性に気づいている点が挙げられる。静岡大学と東京学芸大学は距離的に離れているために、より積極的な相手へのアプローチやコミュニケーション方法の工夫が求められる。お互いに受け身の状態では、話し合いや情報共有ができないことを、工作教室における学芸大生との連携を通して学生自身が実感してきている。その経験から、学生自らが率先して、お互いの大学訪問を計画・実行したり、情報共有するために会議資料などの蓄積を行ったりしてきた。また、コミュニケーションツールとして、参加当初は電子メールのみの活用に留まっていたが、参加年数を重ねる中で、電話や対面による打ち合わせ、SNSやSkypeを取り入れ活用するようになってきた。学芸大生との連携を通して、自分たちの意識の向上や積極的な行動及びコミュニケーション方法の工夫が必要であることを実感し、それを具体的なかたちで実行している姿が見受けられる。

- 工作教室のことを深く丁寧に考える学芸大生の視点が静大生とは違っていて、刺激を受けたと同時にいろいろなことを学んだ。
- 普段は他大学の学生と交流する機会がないので、学芸大の講義の様子や色々な活動の様子が聞き、刺激を受けることができた。
- 学芸大生と連携をして地域のイベントに参加する意義は、違う大学と考えを共有できることだと思いました。いろいろな考え方ややり方があるのだと思うことが沢山ありました。自分の大学の意見の方が絶対に正しいと思っても学芸大生に受入れてもらえなかったり、逆に正しいと思っていたことが学芸大生の意見を聞いて違っていたと思ったりすることもありました。そうやっていろいろな考え方ややり方を知ることができ、視野を広げていくことができた。
- 他大学の先生や学生と交流することで、大学の様子を知れたり、視野が広がったりした。
- 準備の大変さはもちろんありましたが、準備や当日、片付けも含めた時間を通して、静大のメンバーや先輩方、学芸大の方々や掛川の方々と一緒に協力して1つのを築き上げる経験をできたことが、参加して良かったと思う点の1番にあげられると思います。言葉では表しきれない程の楽しさや喜び、その難しさも身を持って実感することができました。

など

図16 工作教室に参加後の静大生の感想

(3) 視野の拡大及び新たな価値観の創造

3つ目の成果としては、学生が同じ教育や美術を学んでいる学芸大生の価値観に触れ、視野の拡大及び新たな価値観の創造を繰り返している点が挙げられる。参加学生の感想の中には、学芸大生との連携を通して、今まで自分が気づけなかった様々な視点から物事を捉えられるようになったとの声が多く聞かれる（図16）。こうした学生のものの見方・考え方などの視野の拡大や新たな価値観の創造は、多角的な視点から問題を捉える力及び分析力の向上やそれに伴う教材研究の能力につながっているといえる。実際に、工作教室に参加し現在教員になっている卒業生からは、工作教室での学芸大生との連携を通して、自分自身の教材研究の視点が広がったことや連携に対する考えや価値観を明確にできたことが指摘されている。

(4) 自己理解や他者理解・受容に関する学び

4つ目の成果としては、学生がお互いの多様な価値観や考え方に触れる中で、自己理解や他者理解を深め、他者を受容することの大切さに気づいている点が挙げられる。連携を通して、学生がお互いの様々な価値観や考え方の違いに触れることは、自分自身の価値観や考え方を改めて見つめるきっかけになると共に、それを明確化することにつながっている。また、工作教室で自分自身が重要視したいことや教材研究などに対する視野の狭さや柔軟性の無さ、技術・知識不足などを実感すると共に、他者を受け入れることの大切さを実感している。「いろいろな考え方がある中で、みんなの思いを受け入れたり受け入れられたりしながら、工作教室をつくっていく中で、いろいろな考えを認め合っていくことを学んだ」といった感想が参加学生から出てきている。学生はお互いの意見や価値観の違いを理解した上で、共に創り出す喜びや達成感を実感していることが、学生の感想などから考察できる。

7. 今後の課題

静大生が工作教室に参加した初年度は、学芸大生の企画に一方的に参加させてもらったため、学芸大生との連携が本当の意味で始まったのは3年前（2008年）からである。そのため、ハード

面の課題解決が早急に望まれるところである。

今後の課題としては、まず、次年度への引き継ぎ方法の検討が挙げられる。学内及び大学間の引き継ぎについては、未だその方法は確立していない。しかし、工作教室への参加学生の入れ替わりは毎年激しく、次年度への引き継ぎは重要な事項となっている。どのような方法や資料を用いて引継ぎを行っていくかは、今後検討していく必要がある。

次に、各大学間及び地域とのよりよい連携プロセスの構築が挙げられる。これまでも、メーリングリストや電話の活用により、情報の共有や打ち合わせなどを重ねてきた。しかし、工作教室後の反省会では、常に意思疎通の困難さが挙げられている。これらの反省を受けて、実際に対面して話し合う場を設けたり、インターネットを活用（SNSやSkypeなど）したりするなどの具体的な案も出てきており、この中には既に実現しているものもある。今後、これらをどのように定着・活用し、よりよい連携プロセスを構築していくかはこれからの大きな課題といえる。

8. おわりに

本論では、静大生と学芸大生、地域の人々が連携協力を行ってきたこれまでの取り組みの報告を行い、各大学の学生連携による成果及び課題について考察を行ってきた。これらの成果と課題を基に、各大学間の連携をより充実したものにできるよう、今後もその在り方を探っていくきたい。また、学芸大生との連携だけでなく、地域の方々との連携を通して学生が学んでいることも多く、今後はその視点からも報告及び考察を行っていききたい。

註

- 1) 2008年から2年間に渡り、4年をリーダーとして工作教室へ参加してきていたが、教員採用試験や卒業研究への取り組みと参加時期が重なるため、本年度からは3年をリーダーとして工作教室への参加を行っている。そのため、本年度は4年生の工作教室当日の参加はなかった。しかし、過去に工作教室への参加経験のある4年生については、事前打ち合わせや教材研究に参加したり、後輩にアドバイスをしたりするなどの積極的な姿が見られた。
- 2) 鉄也悦朗「東京学芸大と静大の学生有志による『かけがわ親子工作教室』支援活動の報告と考察」, 大学美術教育学会, 第49回大学美術教育学会 研究発表概要集, 2010, p. 40.
- 3) 近年では、連絡用として静大内部で新たにメーリングリストを作成し、全体のメーリングリストとの使い分けを行っている。これは、学芸大生や実行委員会でも同様に行っている。
- 4) 両大学の学生を工作教室の役割毎に、導入班, 材料班, 鑑賞班に分かれ内容の検討を行った。
- 5) 静大生と学芸大生は、工作教室の前日に現地入りし、実行委員と共に会場準備や最終打ち合わせを行った。
- 6) このコミュニティのメンバーは、静大生, 学芸大生, 実行委員会などから構成されており、現在コミュニティ参加人数は29名となっている(2010年10月現在)。
- 7) この学生は、工作教室での親子による造形活動の取り組みに対して問題意識を持ち、それを自分の卒業論文のテーマに設定した。さらに、連携や工作教室のプロセスを学んだ経験を活かして、同級生や後輩と協力しながら、自ら親子造形ワークショップを企画及び実施した。